

# ミャンマー漆工芸の基礎的研究

—技術・材質の調査を中心として—

須 山 聖

## 1. はじめに

漆芸文化は東南アジア・東アジアのみで見られるアジア特有の文化である。そのようなアジア独特の漆芸文化が現在衰退の一途をたどっている。だがミャンマーでは、衰退しつつあるとはいえ漆芸文化がまだ生活の中に根付いている。しかし今は生活の中で生きていくとはいえ、今後衰退していくであろうことは疑いない。そのミャンマーの衰退しつつある漆芸文化を独自に調査し、その結果を歴史学的・民族学的に研究をし、保存科学的に分析をして、日本では決定的に不足しているミャンマー漆工芸文化の基礎的な情報としてまとめ上げ、まだ生きていくミャンマー漆工芸文化を総合的に記録・保存することを目的として研究をおこなった。

## 2. ミャンマーの漆工芸

### 2-1 歴史

漆使用の起源としては6世紀頃とされている。何かを貼るのに漆を使用した形跡がある箱がタイエーキタヤから発掘されている。これがミャンマーでの漆の使用の起源とされている。漆器の起源としては不明な部分が多いが、7～9世紀に中国雲南地域の国の南への侵攻とともに漆工技術も南下し、ミャンマーをはじめとする東南アジア地域にもたらされたと考えられている。雲南から南下してきた技術とミャンマーの漆という素材が合わさり漆工芸と

して花開いたのは11～13世紀のバガン王朝の時代である。また加飾の施された漆器がミャンマーで見られるようになるのは16世紀になってからである。加飾技法はランナータイ王国との交戦の過程でもたらされた。

## 2-2 産地

現在ミャンマーで漆器が作られている地域はバガン・チャウカ・ナムパン・チャイントンなどである。バガンが特に大きな漆器の産地で、チャウカもそれに次ぐ規模である。ナムパンとチャイントンは規模は大きくない。それ以外にもさらに規模は小さいがマンガレーなどの地域でも作られている。

## 3. 漆工芸の材質と技術

### 3-1 材質

漆はビルマウルシと言われるタイやミャンマーで採れる漆を使用している。顔料は人工顔料を中国やインドから輸入して使用している。胎材としてはメーティンカー・ティンワと言われる竹がほとんどである。作り方としては(A)巻胎素地、(B)籠胎素地などの方法に加え、(C)最初に底を編む籠胎素地、(D)型を使う籠胎素地、(E)ひねりを加える籠胎素地などの5つの加工方法が存在する。また(D)の一種として、ミャンマーとタイでよく見られる馬の毛を編み込み強度を増した馬毛胎素地がある。

### 3-2 技術

最も基本的な漆器の作り方は素地を作り、下地として漆に何かを混ぜたものを3回塗ってから、上塗りとし黒色の場合は1回以上、赤色の場合は2回以上漆を塗るという方法である。この方法がミャンマーでの最もスタンダードな漆器の作り方である。

加飾方法は①彫った跡に彩漆を埋め込む“蒟醬”、②金箔で模様を描く“箔絵”、③灰などの粉末を混ぜ餅状にした漆で模様を描く“堆起漆”、④若

狭塗りに似た“変わり塗り”、⑤“根来風”などの技法が主におこなわれている。①～③はミャンマーで古来からおこなわれている技法で、起源としては16世紀と言われているが、今回の調査結果から②箔絵だけはそれ以前におこなわれていた可能性があることが判った。④と⑤は1954～1955年に技術交流で日本からもたらされた技法である。

## 4. 資料分析結果

### 4-1 調査結果分析・結果

調査結果からミャンマーの漆器産地の特徴が見られた。バガンは素地として(D)型を使う方法を使用することが特徴である。また東南アジア特有の漆器である馬毛胎漆器を作るのはミャンマー国内ではバガンだけである。チャウカでは輸出用として例外的に蒟醬や堆起漆の漆器を制作する以外は、無加飾の漆器が作られる。ナムパンは少数民族のための供物用の無加飾漆器を数多く作る。チャイントンは堆起漆を施した漆器を作ることが特徴である。

### 4-2 科学的分析・結果

赤色顔料使用傾向を探るために顔料自体と漆器を試料として蛍光X線分析をおこなった。その結果バガンのものからは水銀(Hg)が、チャウカのものからは鉄(Fe)が主成分として検出された。そのためバガンでは朱(HgS)が主に使用され、チャウカでは弁柄( $Fe_2O_3$ )が主に使用されていることが判明した。また調査地域や時代の素地制作技法の差異を明らかにするため、いくつかの漆器をX線撮影して内部構造を調査した。その結果、以前は(B)籃胎素地が今より頻繁に使用されていた可能性が高いことが確認された。また皿を作る際にバガンなどでは(A)巻胎素地を使用し、ナムパンでは(C)最初に底を編む素地を多く使用していることが判明した。

## 5. 考察

### 5-1 材質

ミャンマーではシャン州産の漆が最も使われている。コストパフォーマンスを重視して最高ランクの漆は使用されることが少ない。蛍光X線分析結果から、バガンなどの装飾用の漆器を制作する地域では顔料として高価な朱を、チャウカなどの実用の漆器を制作する地域では顔料として比較的安価な弁柄を使う傾向が強い。ミャンマーでは竹製素地が非常に重宝されている。この理由は、小刀一本で容易に加工可能であるという利点が多い。また木製素地に比べて柔軟性がある竹製素地は乾いた後にも柔らかいミャンマーの漆と相性が良いということもあり、ミャンマーでは素地としての竹が盛んに使用されている。

### 5-2 技術

現地での調査結果とX線撮影した結果から、ミャンマーでは過去は(B) 籃胎素地が多かったが、現在では(A) 巻胎素地を作る産地が多くなっている傾向があることが判明した。巻き上げる巻胎素地の方が作るのに特別な技術を必要としなく、効率的に素地を作ることができるということがこの変化の起こった理由である。地域の特徴としては高度な技術が必要な(D)型を使う素地はバガンの特徴で、先祖代々の技術を重んじるナムパンでは、古来からの(C)最初に底を編む素地を使用している。

高度な技術を誇るバガンでは大部分の加飾技法を施すことができる。様々な加飾を施すので多色を使う。その他の地域では加飾あまりおこなわれないので、赤と黒という本来の色使いの漆器を作る。バガンなどでは加飾を施した鮮やかな色使いの漆器を作り、チャウカなどでは加飾の極めて少ない実用的な漆器を制作している。

### 5-3 各地域の差異

以前に比べ情報の伝達が早くなっているミャンマーでは、どの地域でも大体の素地制作技法・加飾技法を施すことはできる。だがミャンマーの漆芸技術にはいまだに差が見られる。特にバガンの技術が突出している。過去は漆工芸が盛んになったバガン王朝時代の王都であったこと、現在では漆学校があることなどから、いまだにレベルの高い漆芸技術が根付いている。このような理由で突出した技術を持つバガンとその他の地域に差が生じている理由としてはいくつか考えられる。

特にバガンとチャウカ間に顕著な“職人の自分達の技術に対するプライド”、バガンなどでは華美な漆器が求められるチャウカなどでは質実剛健な漆器が求められているという“必要とされている漆器の違い”、そして根が深い問題である“民族間のわだかまり”などのことが要因で人の移動や情報の伝達が比較的早くそして容易になってきている今でも漆器制作技術に差が見られる。

## 6. まとめ

現在漆器はミャンマーでは衰退しつつある。どこに産地でも漆器制作だけでは生活費を稼ぐことができずに食べていけないという現状である。漆器の先行きは明るくない。だがミャンマーで漆器が絶滅するということは考えにくい。ミャンマーの人は信仰心が厚く、仏教関係のことにはお金も労も惜しまない。その仏教に関するものに漆は大量に使われているからである。パゴダや仏像に金箔を貼るのに漆を使用したり、またパゴダや仏像を赤く装飾するのに漆を使用する。そして僧侶や仏に供える時の容器として漆器を使用する。これらのように漆には仏教関連の需要が相当である。同時に漆器も必要とされている。ミャンマーの人が仏教を大切に思う限り、漆器が絶滅する可能性は低い。